

「はぁ～、本当にひどい目にあったね麗子さん……」

「そ……そうね……モデルの仕事ってこんなに大変だったのね……」

中川と麗子、美男美女の二人は大原部長へのプレゼントを「自分の身体を張ったアルバイト」で稼ぐためにある旅館に来ていた。

実は、両津のバイト先「お笑い芸人の温泉ロケ」と入れ替わってしまっていたのだが二人はそれに気付くことはなかった。

そして、温泉での仕事として中川が麗子のサラサラの金髪の上に「ちょんまげ！」などと言ってチンポを乗せるお下品な撮影を終えた後だった。

二人は疲れた表情で浴衣に着替えて、部屋で待機していた。

さすがに気心しれた仲とは言え自分のチンポを頭の上に乗せたことに中川は申し訳なくあり、かつ麗子もハッキリとモノを見たうえで髪とは言え触れたことを思い出して頬を赤くしていた。

「い、いや、その、ごめんね、麗子さん……こんなことになるなんて……」

「え……い、いいのよ……圭ちゃん。圭ちゃんはお仕事をしただけなんだし……ね？」

お互いに気遣いはしつつも、自分たちでやったことに対する恥じらいが強かった。

そんな微妙に走る気まずさの中で、つい麗子は気になったことを口にしてしまった。

「そう言えば……ちょんまげしているときに……あの、ナニが震えていたのは……なに？」

「え！？ あ……あれは……」

微妙な二人の緊張感と言うか、気まずい空気を脱しようと麗子が発したそれに中川は困ったように頭に手を当てた。

素直に言うべきかどうかの悩みと言うか何とも言えない空気を醸し出した後に――。

「いや、あの、ちょっと、その勃起しちゃって……」

「えっ！？ ちょっと、圭ちゃん何言って……」

「れ、麗子さんが聞くからですよっ！ 僕だって好きで言ったわけじゃないんですからね!？」

——はっきりと素直に告げはしたが、あまりにハッキリしすぎていて麗子は口元に手を当てて驚いてしまった。

驚かれても困るのは中川だ、自分だって言いたくて言ったわけではない、と立ち上がるのだが、着ているのはもちろん浴衣で、麗子は座ったままだ。

「あ……」

「……………」

二人の間ではさっきの「ちょんまげ」が思い出されて一瞬固まってしまう。

どちらともなく無言になると、中川は改めて座りなおした。

そして、少しの沈黙の後に——。

「も、もう、圭ちゃんも結構エッチ、よね、両ちゃんみたい」

「先輩ほどは酷くないですよ……麗子さんの髪が、サラサラで気持ち良かったし……」

——なんて気まずい会話が続いていく。

麗子少しだけ悪乗りしながら、自分も恥ずかしいのでその美貌を赤く染めてクスクス笑っていた

「次やるときは、ちゃんとかよんまげにしてね？ あれだとチョンマゲじゃないもの♥」

「いや〜、もうコリゴリだよ、こういう仕事は……」

まだ気まずくはあり、二人は視線を合わせないまま話していく。

麗子は笑いながら「今度は私がおっぱいでミツ●ーやってあげるわ」なんて没になったネタを言って、言った後に少し後悔して恥じらうのだった。